日台の意見文における「主張」の現れ方
――日本語版と母語訳版のタイトルと文章構造の分析――

髙橋圭子（東洋大学）・林淑璋（元智大学）・伊集院郁子（東京外国語大学）

【キーワード】 意見文、主張、タイトル、文章構造、母語の影響

１．はじめに

高等教育機関における日本語教育においては、アカデミックな文章を日本語で執筆する能力の育成が求められている。アカデミックな文章とは、論文やレポートなど、「主張」とそれを支える「根拠」が論理的に組み立てられた文章であり、その準備段階として「意見文」の指導が行われている日本語教育機関も多い。

伊集院・髙橋（2012）は、日本人大学生と台湾・韓国の日本語学習者の意見文を分析し、論理的な文章のための指導項目として、タイトル及び文章構造の重要性を指摘している。タイトルは、読み手が内容を推測したり本文を読むか否かを選択したりする際の重要な情報源であり、アカデミックライティングに不可欠な要素である。また、文章構造とは、「主張」や「根拠」の配置を中心とした文章全体の展開のことである。読み手が論旨を的確に把握できるかどうかは文章構造の適否によるところが大きいため、木戸（1992）、杉田（1994）、佐々木（2001）、Lee（2006）など先行研究も多い。しかし、意見文の主張展開をタイトルまで含めて分析した先行研究は、伊集院・髙橋（2012）を除き見当たらない[1]。

本研究では、日本語母語話者（JP）と学習者の相違の要因の１つとして母語の影響の可能性を探るため、伊集院・髙橋（2012）のうち、台湾（TM）の日本語学習者に焦点を当て、同一執筆者による日本語の意見文（TMJ）と同じ内容の母語による意見文（TMT）を分析に加え、日本（JP）の大学生による日本語意見文と比較し、それぞれのタイトルの形式・機能、文章構造上の主張の位置の異同を明らかにすることを目的とする。

２．分析データ

本研究では、「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文データベース」（http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/ijuin/koukai_data1.html）から、日本及び台湾の大学生による日本語の意見文（JP、TMJ）と、台湾の同一執筆者による母語訳版（TMT）を分析データとして用いる。TMT は、日本語意見文（TMJ）執筆後に、逐語訳ではなく、同じ内容を自然な母語で執筆

1　日本語の文章構造に関する先行研究は、伊集院・髙橋（2012）にまとめられている。

するよう依頼したものである。

データの意見文は、次の課題文に基づき、辞書などは使用せず、800字程度で執筆されたものである。

> 今、世界中で、インターネットが自由に使えるようになりました。ある人は「インターネットでニュースを見ることができるから、もう新聞や雑誌はいらない」と言います。一方、「これからも、新聞や雑誌は必要だ」という人もいます。
> あなたはどのように思いますか。あなたの意見を書いてください。

JP･TM はともに大学生であり、同等のアカデミック能力や知識が想定されている。TM は、旧日本語能力試験２級相当（学習時間600時間相当）以上の日本語学習者を対象として募集を行い、集まった学生である。実際の日本語能力を測定する目安として筑波大学留学生センターで開発された日本語能力簡易試験（SPOT ver.2）も実施した。SPOT の平均点は65点満点中45.3点であった。

分析対象のデータの概要を表１にまとめる。「本文中の文数」は、意見文の全体からタイトルを除いた部分、すなわち「本文」を構成する文の数を表す。「文」は、作文に用いられた句点によりカウントした[2]。段落は、作文執筆者自身が原稿用紙上に設けた空白マスや改行によって認定した。

表１　分析データの概要[3]

データ名	作文数	タイトル数	本文中の文数（平均）	段落数（平均）
JP	134	133	2176（16.2）	553（4.1）
TMJ	57	57	1050（18.4）	252（4.4）
TMT	50	49	―	223（4.5）

３．分析と考察

3.1　タイトルの形式と機能

まず、タイトルの形式を表２、機能を表３のように分類した。以下、タイトルに付されているのは、データベースによる作文執筆者 ID である。TMT のタイトルには、本稿執筆者が日本語訳を（　）に記入した。

2　ただし、TMJ については、明らかな文末形式でありながら句点のない場合、共同研究者のうち日本語母語話者２名で協議して句点を補った箇所もある。具体的箇所については「データベース」エクセルファイルの「日本語テキスト注」欄に注記されている。また、TMT の本文中の文数は、文の定義の問題があるため、カウントしていない。

3　「作文数」に比して「タイトル数」が少ないのは、タイトルが空欄で提出された作文があるためである。また、TMJ に比して TMT の作文数が少ないのは、7名が母語訳版を提出しなかったためである。

表２　タイトルの形式の分類

形　式		例
不完全文	名詞	JP 008　新聞・雑誌の必要性
		TMJ 016　インターネットと新聞、雑誌
		TMT 020　報紙和雑誌（新聞と雑誌）
	句	JP 123　新聞や雑誌の必要性について
		TMJ 046　新聞や雑誌の必要性に就て
	末尾の省略	JP 092　新聞・雑誌よりもインターネット
		TMJ 040　インタネットがあればこそ新聞も雑誌も必要
		TMJ 053　新聞と雑誌は必要
完全文	平叙文	JP 021　新聞、雑誌はなくならない
		TMJ 051　新聞や雑誌は必要だ
		TMT 051　報紙和雑誌是必要的（新聞と雑誌は必要だ）
	疑問文	JP 012　インターネットは新聞・雑誌を駆逐するか？
		TMJ 023　新聞や雑誌は必要でしょうか。
		TMT 023　新聞或雑誌是必須的嗎（新聞や雑誌は必要か）

表２のタイトルの形式のうち、「末尾の省略」は、完全な文とは言えず、文の末尾に省略が見られるものである。具体的には、TMJ053「新聞と雑誌は必要」のように文末の「だ」が省略されたものや、JP073「手間がかかるからこそ」のように述部の用言が省略されたものがある。ただし、後者の用言の省略形式が見られたのは JP のみである。

表３　タイトルの機能の分類

機　能	定　義	例
主張明示	書き手の意見・主張が明示されているもの	JP 005　新聞擁護論
		TMJ 020　新聞や雑誌は必要だ
		TMT 049　新聞或雑誌是必要的！(新聞や雑誌は必要だ！)
主張示唆	主張明示とも主張不明とも解釈可能なもの	JP 016　新聞・雑誌の意義
		TMJ 022　新聞や雑誌の必要性
		TMT 032　報紙和雑誌的必要性（新聞と雑誌の必要性）
主張不明	単なる話題提示など書き手の意見主張が明示されていないもの	JP 130　新聞・雑誌の将来について
		TMJ 004　インターネットと新聞
		TMT 021　不平衡的世界（アンバランスな世界）

タイトルの機能は、李（2008）を参照し、表３のように「主張明示」「主張示唆」「主張不明」の３種類に分類した[4]。例えば、JP005「新聞擁護論」、TMJ020「新聞や雑誌は必要だ」、TMT049「報紙或雑誌是必要的！」は、いずれも新聞や雑誌を擁護する立場であることが明示されているため、「主張明示」と名付けた。一方、JP016「新聞・雑誌の意義」は「新聞・

4　タイトルの機能の認定及び3.2節で示す文章構造の認定は、共同研究者（本稿執筆者3名に加え、韓国東国大学校の盧「女主」鉉氏）と台湾の母語話者2名の協力を得て行った。伊集院・林・盧・髙橋（2012）での発表に際し、機能の認定に関するマニュアルを精緻化した上で人数を増やして見直し作業を行ったため、伊集院・髙橋（2012）の表6の数値と若干異なる箇所がある。

雑誌には意義がある」という主張（＝新聞雑誌擁護論）を伝えているとも解釈できるが、「新聞・雑誌の意義について」という話題を提示しているという解釈も可能である。同様に、TMJ022「新聞や雑誌の必要性」は、「新聞や雑誌は必要だ」という主張が読み取れると同時に、「新聞や雑誌の必要性について」という話題提示でもある。そこで、このようなタイトルは「主張示唆」と名付けた。また、TMJ021「不平衡的世界」のように主張が読み取れないタイトルは「主張不明」と名付けた。同様に、TMJ023「新聞や雑誌は必要でしょうか。」のような「疑問文」の形式のタイトルも、問題提起による話題提示と解釈し、「主張不明」とした。

表２・表３に基づきタイトルの形式と機能を分析した結果が表４である。

表４　タイトルの形式と機能

JP		主張明示（%）		主張示唆（%）		主張不明（%）		合計（%）	
不完全文	名詞	28	(21.1)	38	(28.6)	21	(15.8)	87	(65.4)
	句	2	(1.5)	9	(6.8)	3	(2.3)	14	(10.5)
	末尾の省略	2	(1.5)	0	(0.0)	5	(3.8)	7	(5.3)
完全文	平叙文	10	(7.5)	1	(0.8)	3	(2.3)	14	(10.5)
	疑問文	1	(0.8)	0	(0.0)	10	(7.5)	11	(8.3)
合計（%）		43	(32.3)	48	(36.1)	42	(31.6)	133	(100.0)

TMJ		主張明示（%）		主張示唆（%）		主張不明（%）		合計（%）	
不完全文	名詞	3	(5.3)	7	(12.3)	14	(24.6)	24	(42.1)
	句	0	(0.0)	2	(3.5)	0	(0.0)	2	(3.5)
	末尾の省略	2	(3.5)	0	(0.0)	0	(0.0)	2	(3.5)
完全文	平叙文	16	(28.1)	0	(0.0)	0	(0.0)	16	(28.1)
	疑問文	0	(0.0)	0	(0.0)	13	(22.8)	13	(22.8)
合計（%）		21	(36.8)	9	(15.8)	27	(47.4)	57	(100.0)

TMT		主張明示（%）		主張示唆（%）		主張不明（%）		合計（%）	
不完全文	名詞	0	(0.0)	10	(20.4)	14	(28.6)	24	(49.0)
	句	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)
	末尾の省略	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)
完全文	平叙文	12	(24.5)	1	(2.0)	0	(0.0)	13	(26.5)
	疑問文	0	(0.0)	0	(0.0)	12	(24.5)	12	(24.5)
合計（%）		12	(24.5)	11	(22.4)	26	(53.1)	49	(100.0)

まず、形式について見てみると、JP・TMJ・TMT のいずれも最も多いものは「名詞」である。「句」「末尾の省略」は TMT には見られない。これは TM の母語と日本語の統語上の相違も一因であろう。「末尾の省略」形式の TMJ の２例（表２参照）はともに「必要だ」の「だ」が省略されているものである。一方、完全文は JP に比して TMJ、TMT に多い。JP に比して TMJ のタイトルに完成文が多い理由として、「名詞」のタイトルに必要な連体修飾部の産出が学習者にとっては容易でないこと（伊集院・髙橋2012）に加え、母語訳版（TMT）でも完全文の使用が多いことから、母語の影響の可能性も考えられる。

次に、機能を見てみると、JP は「主張示唆」が、TMJ･TMT は「主張不明」が多い。JP の「主張示唆」48例のうち、38例は「必要性」「重要性」などの「名詞」の形式、９例はそれに「について」などが付された「句」の形式である。一方、TMJ・TMT の「主張不明」のうち約半数（TMJ27例中13例、TMT26例中12例）は「疑問文」の形式である。このような形式上の特徴にも、母語の影響が見られると言えるだろう。タイトルの形式と機能には密接な関係が

あるため、中級以降の文章表現指導では、短いタイトルの中で主張を明示あるいは示唆したい時、話題として提示したい時、読み手に問いかけたい時、それぞれの場合にどのような語彙や文法形式を用いると良いかを指導することも有効であろう。

さらに、TM の同一執筆者によるタイトルを見てみると、日本語版（TMJ）と母語訳版（TMT）でタイトルの形式と機能が異なるものは以下の４例であった[5]。

● TMJ020　新聞や雑誌は必要だ〈文・主張明示〉
　TMT020　報紙和雑誌（新聞と雑誌）〈名詞・主張示唆＞
● TMJ037　これからも、新聞や雑誌は必要だ〈文・主張明示〉
　TMT037　報章雑誌的重要性（新聞と雑誌の重要性）〈名詞・主張示唆＞
● TMJ041　新聞や雑誌は必要だ〈文・主張明示〉
　TMT041　報紙與雑誌的必要性（新聞と雑誌の必要性）〈名詞・主張示唆＞
● TMJ053　新聞と雑誌は必要＜末尾の省略・主張明示＞
　TMT053　無形取代有形？（無形が有形にとって代わる？）＜疑問文・主張不明＞

TM053は、日本語版と母語訳版で意味が異なる例外的なタイトルである。TM020・TM037・TM041の３例からは、母語の影響の可能性よりむしろ、学習言語では「名詞」で主張を示唆するより「文」で主張を明示する方が容易である可能性が考えられる。

3.2　タイトルの機能と本文の文章構造との関係

次に、タイトルの機能と本文の文章構造との関係について分析する。

文章構造を主張の位置によりまとめたものが表５である。型名は、表１で認定された段落に基づき、「主張」が「はじめ」（第一段落）、「おわり」（最終段落）、「なか」（それ以外）のどこに出現しているかにより決定した[6]。「主張」は、「テーマに関する書き手の意見が明確に表されているもの」（伊集院・髙橋2012：4）と定義し、共同研究者間の判定が異なった場合は、李（2008）を参照し、主に「叙述表現が主張を表すもの（特に、第三者に対する要望や当為の文の機能をもつもの）」、「意味の完結度の高いもので、文脈への依存度が低く、他の文からの独立性が高いもの」という基準を満たしているか否かという観点から協議の上、判定した。表３・表５に基づき、タイトルの機能と文章構造の型を分類したものが表６である。

5　TM の同一執筆者によるタイトルで形式が異なるものはこの他に３例あるが、いずれも、TMJ が「末尾の省略」「句」という TMT には見られない形式のものであり、意味や機能は変わらない。なお、形式が同じで機能が異なるタイトルの例はない。

6　作文執筆者が原稿用紙に設けた空白マスや改行では本文が３段落以上の構成であると認定できない意見文については、内容を考慮に入れ共同研究者を中心に３段落以上に認定し直し分析を行った。

表５　主張の位置による文章構造の型

型名	はじめ	なか	おわり
頭型	○	―	―
中型	―	○	―
尾型	―	―	○
頭尾型	○	―	○
頭中型	○	○	―
中尾型	―	○	○
分散型	○	○	○
非明示型	―	―	―

表６　タイトルの機能と本文の文章構造

JP	主張明示（%）		主張示唆（%）		主張不明（%）		合計（%）	
頭型	1	(0.8)	1	(0.8)	0	(0.0)	2	(1.5)
中型	0	(0.0)	1	(0.8)	1	(0.8)	2	(1.5)
尾型	3	(2.3)	4	(3.0)	11	(8.3)	18	(13.5)
頭尾型	33	(24.8)	29	(21.8)	19	(14.3)	81	(60.9)
頭中型	1	(0.8)	0	(0.0)	1	(0.8)	2	(1.5)
中尾型	4	(3.0)	8	(6.0)	9	(6.8)	21	(15.8)
分散型	1	(0.8)	4	(3.0)	1	(0.8)	6	(4.5)
非明示型	0	(0.0)	1	(0.8)	0	(0.0)	1	(0.8)
合計（%）	43	(32.3)	48	(36.1)	42	(31.6)	133	(100.0)

TMJ	主張明示（%）		主張示唆（%）		主張不明（%）		合計（%）	
頭型	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)
中型	0	(0.0)	0	(0.0)	6	(10.5)	6	(10.5)
尾型	2	(3.5)	1	(1.8)	9	(15.8)	12	(21.1)
頭尾型	8	(14.0)	5	(8.8)	5	(8.8)	18	(31.6)
頭中型	1	(1.8)	0	(0.0)	1	(1.8)	2	(3.5)
中尾型	7	(12.3)	1	(1.8)	6	(10.5)	14	(24.6)
分散型	2	(3.5)	2	(3.5)	0	(0.0)	4	(7.0)
非明示型	1	(1.8)	0	(0.0)	0	(0.0)	1	(1.8)
合計（%）	21	(36.8)	9	(15.8)	27	(47.4)	57	(100.0)

TMT	主張明示（%）		主張示唆（%）		主張不明（%）		合計（%）	
頭型	1	(2.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	1	(2.0)
中型	0	(0.0)	1	(2.0)	4	(8.2)	5	(10.2)
尾型	0	(0.0)	0	(0.0)	4	(8.2)	4	(8.2)
頭尾型	6	(12.2)	6	(12.2)	4	(8.2)	16	(32.7)
頭中型	0	(0.0)	1	(2.0)	1	(2.0)	2	(4.1)
中尾型	5	(10.2)	1	(2.0)	9	(18.4)	15	(30.6)
分散型	0	(0.0)	2	(4.1)	3	(6.1)	5	(10.2)
非明示型	0	(0.0)	0	(0.0)	1	(2.0)	1	(2.0)
合計（%）	12	(24.5)	11	(22.4)	26	(53.1)	49	(100.0)

JP の文章構造は、「はじめ」と「おわり」で主張を述べる「頭尾型」が81例（60.9％）を占め、他の型を大きく引き離している。これに対し、TMJ と TMT は、「頭尾型」が最も多い型ではあるものの、それぞれ18例（31.6％）、16例（32.7％）であり、次点の「中尾型」がそれぞれ14例（24.6％）、15例（30.6％）に迫り、JP ほど圧倒的ではない。TM の文章構造は JP ほどには「頭尾型」が標準とは言えず、そのような母語の特徴が日本語版（TMJ）に影響を与えた可能性も考えられる。また、TMJ・TMT の「中尾型」や「尾型」の特徴を見てみると、問題提起、話題提示といった前置き的部分が長く、それだけで最初の段落を占め、主張が第２段落以降に来ている例が少なくない。このような文章構造の意見文において、さらにタイトルが「主張不明」であると、読み手は主張が読み取れない状態のまま読み進めなければならなくなり、読み手にかかる負荷はかなり大きくなる。

むろん、文章の前半では主張が明確にならないような手法でも、高度なレトリックで読み手の興味を引き付け、むしろ説得力のある結論に結び付けることも可能であろう。しかし、日本語表現にも誤用が見られ、意図が伝わりにくい文が散見されるような習得の段階では、前置き部分と本論のバランスを考えて執筆するよう指導する必要性があるだろう。

次に、タイトルの機能と文章構造の関連を見てみると、JP に特徴的な意見文は、「主張明示」「主張示唆」のタイトルで、本文でも「はじめ」と「おわり」で主張を述べる頭尾型のものであり、62例（47％）を占める。これは、読み手にとって主張が読み取りやすく、負荷が少ないが、TMJ は13例（23％）、TMT は12例（25％）に過ぎない。

一方、タイトルが「主張不明」で、本文でも「はじめ」の部分に主張の明示がない文章構造（中型・尾型・中尾型・非明示型）の意見文は、JP で21例（16％）のところ、TMJ は21例（37％）、TMT は18例（37％）あり、JP に比して日本語・母語とも TM に多い。これも、日本語版（TMJ）に対する母語の影響の可能性が考えられる。

例えば、以下に示すのは TMJ026の意見文である。行頭の数字は文番号、□は空白マスによる段落の開始、■は改行による段落の終了、■ L は意見文の終了を示す[7]。誤用も含め、執筆者が書いたとおりに提示する。

00　インターネットの発展と伝統 mass media の関係
01　□もう21世紀に入った今日、科学の進展のスピードは昔より速い、いろんな新しいも研発されました。
02　この中、もっとも大切なのはインターネットの発明だと思います。■
03　□最初、インターネットは軍事の用途として使われますが、その後、民間に開放して、学術と商業の用途になりました。
04　インターネットはいい点がいろいろ、例えば、台湾にいる筆者はもし緊急な仕事が米国の同僚に伝えたかったら、昔、私はただ手紙や FAX 或は電話という方法が選べました。
05　遅くて費用も高いです。
06　今、そういう場合があれば、ただインターネットで e-mail を使って、数分間私の仕

7　データベースには、原文に関するその他の記号（字体の相違、判読不能の文字など）も付されているが、ここでは省略する。

事が終ります。
07　その他、われわれもインターネットでインフォメーションをもらえます。
08　米国でプロ野球をしている松坂とイチローは今どうだった？
09　日本のプロ野球選手ダルビッシュー今の試合は勝ちますか？
10　韓国の大統領の選挙は終るそうですね……
11　そういうことはただインターネットを使ってすぐ分ります。
12　これは昔想像できないことです。
13　インターネットは地球を小くなって、世界中の人人を結んだとも言えます。■
14　□でも、インターネットの速い発展に連れたのは伝統のマス・メディアの衰退です。
15　その中、もっとも重い衝撃を受けたのは新聞です、
16　インフォを伝うスピードはインターネットより遅くて、費用も要ります。
17　ですから、ある人人が新聞が代られるかという疑問を出しました。
18　しかし、私はそう思いません。
19　伝統のマス・メディアは今厳しい冬に直面していますか、もし新しい戦略を出したらこれからも生き生きと存続していきますと思います。
20　方法はいくつがあります：
（中略）
27　ですから、自分の新聞社の利益と民衆の利益とも注意すべきです。■ L

タイトル「インターネットの発展と伝統 mass media の関係」は話題を提示する「主張不明」である。第１段落（文01-02）、第２段落（文03-13）は背景的情報[8]とインターネットの長所を、第３段落のはじめ（文14-16）も背景的情報と新聞の不利な点を述べており、ここまで読んだ段階では新聞・雑誌は不要という主張かと予測するのが自然だろう。しかし、文17に至って問題提起、文18で新聞不要論の否定という主張が示され、予測は覆される。全27文の意見文のうち、半分以上の文01-16が「譲歩[9]」のマーカーもないまま「主張」とは逆の意見の根拠になりうる情報で占められており、バランスに欠けている。

このような意見文は、上述のとおり、読み手が主張を読み取るまでに時間を要し、負荷が大きくなる可能性があるため、主張に至るまでの情報が主張を支える効果的な内容であるか、論の流れが明快であるかを十分に確認するよう、指導する必要があるだろう。

なお、台湾の同一執筆者による日本語版（TMJ）と母語訳版（TMT）の意見文で、文章構造が異なる例が、50組中18組あった。この要因はさまざまであり、例えば、学習言語である日本語版（TMJ）の方が文章表現を簡素化できず母語訳版（TMT）より多く「主張」を述べるため、と考えられる場合もあれば、TM は JP より最終段落で「補足[10]」を述べる傾向にあり、その影響によるためと考えられる場合もある。また、母語訳版（TMT）の日本語版（TMJ）との異同も、意見文の冒頭から最後までほとんど逐語訳に近いものもあれば、内容的には

8　「背景的情報」とは歴史的背景や社会的、個人的状況を説明する個所を指す。
9　意見文における「譲歩」については、伊集院（2010）、工藤・伊集院（2013）などで詳しく分析されている。
10「補足」とは、主張についてそれまでとは別の角度から補足的に言及しているもので、私的または感情的な見解や、主張の認定基準を満たさなかったコメントが含まれる。

TMJ と同一でも表現的にはより自由で自然な母語で執筆されたものもある。TMJ と TMT の文章構造の相違は、これらの要因が複雑に絡み合ったものと考えられるが、同時に、母語訳版を用いた分析の限界を示しているとも言えるだろう。日本語学習経験のない台湾の母語話者が母語で直接執筆した意見文の分析が、今後の課題である。

４．まとめと課題

本研究は小規模ではあるが、台湾人日本語学習者が日本語で執筆した意見文（TMJ）と同内容を母語で執筆し直した母語訳版の意見文（TMT）を、日本語母語話者による意見文（JP）と対照し、タイトル及び文章構造上の主張の現れ方について考察した。また、分析結果から考えられる、台湾人日本語学習者への文章表現指導上の留意点についても言及した。本研究で分析した TMJ データは57編に過ぎず、本研究の結果を一般化することはできないが、台湾人学習者による日本語意見文は母語での執筆のし方と同様の傾向を示し、日本語母語話者による日本語意見文とは相違する点があることがわかった。この結果から、台湾人学習者による日本語意見文には、母語が影響している可能性が考えられる。

しかしながら、この仮説を検証するためには、今後、さらにデータを増やして検証するだけでなく、日本語学習経験のない台湾の母語話者が母語で直接執筆した意見文の分析も行い、本研究データの TMT に見られた特徴がさらに色濃く表れるか否かを明らかにしなければならない。また、学習者が母語で受けた文章表現指導の内容についても調査する必要があると考える。

【付記】本稿は、伊集院・林・盧・髙橋（2012）ポスター発表の一部に加筆修正を行ったものである。また、本研究は JSPS 科研費19720119の助成を受けたものである。

引用文献

伊集院郁子（2010）「意見文における譲歩構造の機能と位置－『確かに』を手がかりに－」『アカデミックジャパニーズジャーナル』第２号、pp.101-110.

伊集院郁子・髙橋圭子（2012）「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文の構造的特徴－『主張』に着目して－」東京外国語大学国際日本研究センター『日本語・日本学研究』vol.2、pp.1-16.

伊集院郁子･林淑璋･盧「女主」鉉･髙橋圭子（2012）「意見文のタイトルの形式と機能－日本･台湾・韓国の比較－」『2012年日本語教育国際研究大会予稿集』p.118.

李貞旼（2008）『韓日新聞社説における「主張のストラテジー」の対照研究』ひつじ書房

木戸光子（1992）「文の機能に基づく新聞投書の文章構造」『表現研究』55号、pp.9-19.

工藤嘉名子・伊集院郁子（2013）「超級学習者の意見文における『譲歩』の論理性」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第39号、pp.1-15.

佐々木泰子（2001）「課題に基づく意見の述べ方－日本人大学生の場合・日本語学習者の場

合－」『日本語教育のためのアジア諸言語の対訳作文データの収集とコーパスの構築』平成11年度～12年度科学研究費補助金基盤研究 (B)(2) 研究成果報告書（課題番号11691041）、pp.219-230.
http://jpforlife.jp/pdf/pr_01-27_sasaki.pdf〈2014年12月19日〉

杉田くに子（1994）「日本語母語話者と日本語学習者の文章構造の特徴－文配列課題に現れた話題の展開－」『日本語教育』84号、pp.14-26.

Lee 凪子（2006）「留学生の書く日本語意見文の分析－日本人学生との比較において－」『立命館法学別冊　山口幸二教授退職記念論集』、pp.399-412.
http://www.ritsumei.ac.jp/acd/cg/law/lex/kotoba05/LEE.pdf〈2014年12月19日〉

Expression of Assertion in Opinion Essays by Japanese and Taiwanese

The Analysis of Titles and Textual Structure in Japanese and Taiwanese Mandarin Writing

Keiko TAKAHASHI, Shichang LIN, Ka-Lin Chen, Ikuko IJUIN

【Keywords】 opinion essay, assertion, title, textual structure, influence of themother tongue

This paper analyzes opinion essays written in Japanese both by Japanese (JP) and Taiwanese Mandarin (TMJ) speaking university students along with mother tongue versions (TMT). The data extracted is from "The Database of Japanese Opinion Essay by University Students from Japan, Korea, and Taiwan." The material is analyzed as follows:

(a) Form and function of the title

(b) Textual structure from the position of assertion

(c) Structural characteristics including both the title and the text

The results revealed the following characteristics:

(1) As for the form of the title, TMJ and TMT utilize full sentence or interrogative forms more than JP.

(2) As for the function of the title, many JP authors suggest their assertions by utilizing noun or phrase forms. On the other hand, many of the TMJ and TMT writers do not demonstrate their assertions clearly. The use of interrogative forms make their assertions less definitive.

(3) As for textual structure, more than 60% of the JP writers assert their opinions in the introduction and the conclusion. TMJ and TMT authors often include a long "preface," which may raise a question and reveal the topic in the introduction without demonstrating an actual assertion.

(4) As for title and main body textual structure, 47% of the JP contributors have titles that demonstrate or suggest the assertion, along with introductions and conclusions further asserting their opinions. Conversely, 37% of the TMJ and TMT essays have titles that do not express the assertion clearly, followed by introductions that do not state the assertion clearly.

These results suggest that the mother tongue exerts influence on the characteristics of opinion essays in Japanese by Taiwan learners, and that we need to focus the learners' attention on the structural importance of the title and text in Japanese writing classes.